



ゲーテンモルンの
マリーは今日も。

koma

午後から降り出した雪がグーテンモルンを白く染めあげた。

すっかり冬になった町の様子を、アンジェは喫茶店の小窓から眺めている。往来はほとんどなく、町は眠ったように静かだ。収穫期も過ぎ、町人たちは冬ごもりを始めている。

煉瓦を積み重ねた暖炉は明るく爆ぜ、どんぐりで作られた馬や柵の飾りが店内を彩っていた。客は自分の他には一人もいない。

「いつ来てもここは変わりませんね」

皺の目立ち始めた手でコーヒーの入ったカップを持ち上げる。

都市で生まれ育った彼女にはグーテンモルンの全てが珍しく、まるでおとぎ話の世界だと思っていた。

「1年やそこらじゃ変わりませんわよ」

何年も通っているうちに親しくなった喫茶店のおかみは慣れた手つきで皿を拭きあげている。

「ミモザさんは、私が前に来たときを覚えてらっしゃるの？」

「もちろんですよ、奥様は美人で記憶に残りますし、お召し物も素敵で若い娘たちはいつも真似をしようと騒いでいますしね」

「知らなかったわ」

アンジェは照れて笑う。

こんなお婆さんになりかけの自分が、流行雑誌の変わりをしているとは知らなかった。

「うちの娘も奥様がお好きで、毎年いらっしゃるのを楽しみにしていますよ」

「ミモザのお嬢さんはおいくつになったのかしら？」

「今年で4つですわ」

おかみは恰幅のいい身体を揺らして答えた。

その時、ふとアンジェは既視感に襲われた。前にもこんな光景を見たことがあった。

ふと考える。

このおかみと初めて出会ったのはいつだったか。

ああ、そうだ。

アンジェは左手の薬指にはまった、品の良い指輪をなでた。

彼と結婚して、少し経った頃。

随分と昔の話だった。

その夫も他界し、アンジェの元には莫大な財産と大きな城が残された。

子供がいないアンジェは、未亡人として各地を転々と旅行するようになって、知らず疲れがたまるとこのグーテンモルンに足を運ぶようになっていた。

グーテンモルンは、いつ来てもまるで昨日もここにいたような感覚がする。

景色は変わらず、人も変わらず、気候は穏やかで。

通常、再びに訪れた町はどこかが変わっている。

地理、建築物、権力者ー。

それなのにこのゲーテンモルンは変わらない。

だからこそ、アンジェは昔に戻りたい時こうしてこの町を訪れるのかもしれない。

「母さん！」

店の入口扉が勢いよく開かれた。

ドアベルがチリンチリンと、いつもより忙しく鳴る。

「こら、なんですジェシカ！お客さんがいらしてるんですよ」

おかみは渋い顔でドア際に立っている少女を睨みつけた。

金髪の髪を後頭部で高く結ったその少女は店内にアンジェの姿を見つけると恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「ごきげんよう、マダム。騒がしくしてごめんなさい」

「ごきげんよう、ジェシカさん。なにか、急いでらっしゃるようね？」

アンジェは貴族らしいゆっくりとした口調で、真っ赤な顔をのジェシカに話しかけた。

「はい。今、教会で遊んでいたんですが、そこに知らない子が倒れているんです！」

「まあ」

アンジェとおかみは目を見開いて、顔を見合わせた。

ジェシカに連れられて行くと、教会の片隅に町の子供が集まっていた。

アンジェとおかみはその輪に割って入り、毛布にくるまった子供に近づいた。

そっと触れた子供の白い頬は氷のように冷たかった。

「捨て子でしょうか・・・」

アンジェが呟く。

こんな子は見たこともない、と集まった大人連中は口々に告げた。

では誰がこの子供をここへおいていったのだろう。

首を傾げるアンジェの隣で、おかみが子供を抱き上げる。

「とりあえず暖かい場所に移さないとー」

「僕の家へ運んでください」

そう言って人垣を前に進み出たのは黒い瞳の少年だった。

「坊っちゃん」

アンジェ同様、周囲も驚きの声をあげる。

少年の名前はフレイ・アルフォード。伯爵家の長男坊だ。

アンジェもアルフォード家とは社交界などで挨拶を交わす程度の繋がりがあった。

若君であるフレイとも何度も話したことがある。

利発な少年だった。

言葉は明瞭で、返答は的確。

大人の会話に混じっても物怖じしない神経には関心したものだ。

確か今年で10になったばかりのはずであるが。

「僕の家はここから近いし、暖炉に火も入っています。爺、馬車に乗せてください」

従者の初老の男が「かしこまりました」と、姿勢正しく腰を折る。

「それが良さそうですね、感謝致します若さま」

おかみは素直に頷いて、馬車に子供をのせた。

フレイも同乗すると、すぐに馬は走り出した。

アンジェはその子供の行方が気になって、召使に馬車を用意させると、アルフォード家へと急いだ。

アンジェがアルフォード家へつくと同時に、年若い女が門前で待っていた。

「マダム、ようこそ」

「こんにちは。突然の訪問は許してちょうだいね。先ほど、あなたの若君が子供を連れて帰ったのだけど」

話しながらフレイの母親であるヘレンは客間へアンジェを案内した。

「倒れていた子供は大丈夫なんですか？」

「大丈夫ですわ、食欲もあります」

しかし、ヘレンの顔色は浮かない。

「なにか問題が起きているのね？」

アンジェがひっそりと尋ねると、ええ、とヘレンは片手で額を覆った。

「あまりに酷い服だったので着替えさせたのですが、骨は浮き出ているし体中青い痣だらけでした、コテを押し付けられたような跡もあって」

そこでヘレンは言葉を詰まらせた。

生まれてから今までを温室で育ててきた彼女には見るに耐えないものだったのだろう。

綺麗に巻かれた栗毛色の髪が、彼女が前かがみになると同時にふわりと垂れる。

「なにがあったのか、どこの誰なのかを聞いても分からないと言うばかりで」

「ヘレン、しっかりなさい。あなたはもう母親なんですよ」

アンジェは、か細いヘレンの両手を自身の手で握る。

「そうですわね。フレイがあんなに気丈なのに、私に取り乱してはいけませんね」

落ち着きを取り戻そうと、ヘレンは顔をあげる。

アンジェは安心させるように、彼女の肩を何度もさすった。

コンコン、と短いノックのあと、カチャリとドアが開き、フレイが顔をのぞかせた。

「母上お加減は？」

「大丈夫ですよ。それよりあの子は？」

「眠りました」

フレイは後ろでにドアを閉める。

「お久しぶりです。アンジェさん。先ほどは挨拶も出来ずに申し訳ありませんでした」

「いいのよ、あの子、早く温めないと凍死してしまうところだったわ。それよりも私はね、すぐに行動をおこせた若さまにとっても驚いたの。お父様に似て責任感があるのね。それに、格好良くなったわ。背も伸びたのじゃない？」

フレイははにかみながら笑う。

「アンジェさんにそこまで言ってもらえるなんて、嬉しいです。背は伸びましたよ、学校のクラスでは今一番なんです」

「まあまあ、それは素敵な殿方になりますわね」

息子を褒められ、ヘレンも隣で嬉しそうに微笑んだ。やはり彼女には悲愴な顔よりも笑顔が似合う。アルフォード家はの暖かさもグーテンモルンの変わらない美点のひとつなのだ。

その笑顔にアンジェは、教会での思いつきを実行する決心を固めつつあった。

「ところで、その子供はどうするつもりなの？」

「回復するまで待って、施設に預けるつもりですわ」

予想していた答えだった。間をおかず、アンジェは口を開く。

「私にその子を引き取らせてもらえないかしら？」

途端にヘレンは首をかしげた。

「まあ、マダム？なぜ？」

「なぜでしょうね。でもこれはもしかしたら神様の思し召しなのかもって思うの。うずくまって眠っていたあの子を教会で見た瞬間から、そんな考えが思いついたの。それにね、私前々から引越しを考えていたの。もう年だし、都会は疲れることがとても多いから」

「グーテンモルンに、住むのですか？」

フレイが漆黒の瞳でまっすぐに見つめ返してくる。

貴族らしい、値踏みするような鋭い視線だった。

何度となくその死線をくぐりぬけたきたアンジェは鷹揚に見つめ返す。

「ええ、そのつもりですよ」

フレイはまだ子供っぽさの残る笑顔で、良かったと呟く。

「では、これからはアンジェさんといっぱい話せますね」

「こんなお婆さんでよろしければ、いくらでもお話させてくださいな」

「とんでもない、アンジェさんの色んな国のお話はいつも面白いです」

アンジェは話がまとまったところで立ち上がった。

「もうお帰りに？」

「はい、明日子供を迎えに参りますわ」

「かしこまりましたわ、お気をつけて」

外套を着込み、罌の広い帽子をかぶる。

馬車に乗る寸前、アンジェは見送りに出てくれたフレイとヘレンを振り返った。

「そうだわ若さま」

「なんですか？」

「あの子供は女のコかしら、男のコかしら？」

「可愛い女のコでしたよ」

「ーそう、ありがとう」

アンジェはゆっくりとステップに足をかけた。

宿泊先に帰ったら忙しい。

グーテンモルンに新しい住居を探し、使用人を探し、都市にある屋敷を引き払い、引越しもしなければいけない。

でも一番重要なのは、新しい家族の名前を考えることだった。

時は流れ、ある日のグーテンモルンは変化を見せた。

「マリー！」

フレイの声に、マリーは顔をあげた。

マリーはその日、泣いていた。

大好きなフレイが、今日この町を去ってしまうのだ。

フレイが軍隊に入ることが決まった日から、マリーは毎日教会に行き祈りを捧げていた。

お願いだから、フレイと引き離さないでください

と。

だけど神様は願いを聞き遂げず、別れの日はやってきた。

神様をなじって、自分の行いを省みながらマリーは教会の隅っこで泣き続けていた。

アルフォード家では身分に関係なく、フレイの門出を祝うパーティーが今日、行われていた。

しかし、昨夜も泣き続けたマリーの目は生まれたての雛鳥のように潰れていてこんな顔で大好きなフレイの前には立てないとうずくまっていたのだ。

「マリー、顔をあげて」

フレイは片膝をついて、マリーの肩に手をのせた。正面から顔を覗き込まれる。

「見ないでください」

顔を隠そうとあげた両手をフレイが素早く掴む。

「どうして？」

「泣きすぎて酷い顔になってるもの、わかるのよ」

「いつもと変わらないよ、マリーは可愛いよ」

柔らかい声と、暖かい微笑みにマリーの心臓はいっきにドクドクとはねた。

「・・・本当に行っちゃうんですか？」

「うん、もうすぐ船で王様のいる場所へ行くよ」

「軍人さんになるの？危ないわ。怪我をしてしまうかも」

「大丈夫、僕は運動神経はいい方なんだ」

知っている。

それで、何度も木にのぼって降りられなくなったマリーは助けてもらったことがある。

「若さまがいなくなったら寂しいです」

とうとう溢れ出した涙に、フレイは切なそうにくちづけた。

マリーを胸にそっと抱きしめる。

「よしよし、僕もさみしいよ」

背中をぼんぼんと撫でられる。

小さな頃からフレイにはこうして慰めてもらった。

マリーを育ててくれているアンジェ夫人とフレイは交流があり、しょちゅう遊び相手をしてくれていた。

日々を過ごすうちに、マリーはフレイに特別な感情を抱いていた。

片恋だとは、わかっている。

フレイが本当の恋人とキスをしている瞬間を見たことがあるし、可愛い菓子ももらっても、美しい宝石ももらったことはなかったからだ。

それに友人のジェシカが言っていた。

若さまはとても高位の貴族だから、私たちじゃ遊び相手が関の山なのよ
じゃあこの苦しい想いは、どうしたらいいのだろう？

フレイは年々美しく、男らしくなってゆく。

それに比べマリーは10になったとゆうのに、まだまだ小柄で、フレイの恋人のようなしなやかさが一つもない。

もう少し経てば、胸のふくらみや、大人の女性のゆな緩やかな体型になれるのだろうか。

マリーは自分も腕を回し、フレイの首に抱きついた。

フレイの柔らかな黒い髪からは整髪料のいい香りがする。

「・・・・・・・・・・いってらっしゃい」

やっとの思いで声を絞り出す。

フレイは応えるようにさらに強くマリーを抱きしめた。

「マリー、ひとつ聞いて欲しい」

囁いたフレイはゆっくりと身体を離し、マリーの髪を指ですいた。

「2年前、母上がなくなった時辛くて悲しくて、僕もいっぱい泣いたんだ」

「若さまが、泣いたの？」

「うん、泣いたよ。今のマリーみたいな顔になった。一人っきりの時に泣いたから誰も知らないだろうけど」

内緒だよ、とフレイが笑う。

「だから今、一人ぼっちで泣いていた君の気持ちが痛いほどわかるんだ」

「心臓がとても痛い？」

「うん、とっても痛いよ」

ああ同じだ。

フレイは真剣な顔で続ける。

「これからも辛いことや悲しいことは必ず起きる。でもこれから先、僕は僕以外の人のそんな気持ちを理解出来ると思うんだ。それは経験値と言って、お金では買えない宝物のひとつなんだよ。そうしてマリーはいっぱい泣いたかわりに、ひとつ大人になれたんだ」
おもむろにポケットから菓子袋を取り出し、マリーの手をとって乗せた。

「はい、これはそのお祝い」

その綺麗な包を受け取って、マリーはぼろぼろの顔で微笑んだ。

「でもこれじゃあ逆に子供扱いだわ」

「そうだね」

二人はようやくいつものように笑い会えた。

マリーは丘を上り、アンジェの待つ家で戻った。

そこは庭付きの小さな一軒家で、二人は細々と暮らしていた。

「ただいま戻りました」

「お帰りなさい、お茶を淹れてあげましょうね」

泣きすぎて頭がくらくらしていたマリーは素直にアンジェに甘え、机についた。

「若さまのお別れはすみましたか？」

丁寧にお湯を淹れるアンジェに、マリーはこくりと頷く。

「そうですか。寂しくなりますね」

「はい」

でも、もう涙はこぼれそうになかった。

涙は尽きないものなのかもしれないと本気で心配していた小一時間前が嘘のようだ。

「ところでマリー、ものは相談ですが、この家を改築して孤児院を作りませんか？」
自分も孤児のマリーは、すぐにその提案にのった。

こうしてグーテンモルンのマリーは忙しい日々を過ごすことになる。

登場人物紹介

マリー・・・主人公。孤児院で育った。明るく働き者だが恋には臆病。

フレイ・・・グーテンモルン出身の陸軍将校。マリーを妹のように可愛がっている。

アンジェ夫人・・・貴族の老婦人。夫は他界しており、子供もいない。有り余る財力で孤児院を
経営している。マリーの育ての親。

ジェシカ・・・喫茶店の娘。マリーの友人。ウェーブのかかった金髪が自慢。よく喋る。

ミモザ・・・ジェシカの母親。太ってる。

イザベラ・・・ウィスター家の使用人頭。痩せてる。

ジョセフ・・・魚屋の三男。

エリ・・・パン屋の娘。美人。

ウィスター氏・・・貴族のおじさん。偉そうでケチ。

エリカ・・・町一番の豪商の娘。

ブラッド・・・フレイの同僚の軍人。都会育ち。

いつになく日差しが眩しかった。

のどかな田舎町に戦火の足音は遠く、新聞一面を飾る軍事記事もどこか別世界の出来事のようにある。

肥沃な大地と緑豊かな田園風景は住まう者の心を落ち着かせる効力があるらしい。

マリーは山盛りの洗濯物を片付けた後、空っぽになった洗濯カゴを片手に小走りで施設に戻った。

と、何やら騒音が聞こえてきて、マリーは軽くため息をついた。彼女の腰辺りまでしか身長のない少年が二人、取っ組み合いの喧嘩を始めていたのだ。

「アナン！メル！止めなさいったら！」

マリーの怒鳴り声は施設中の誰よりも大きく、雷に打たれたかのように少年らは動きを止めた。

「もうっなにやってるの！」

しかめっ面のマリーに少年二人は「だって」「こいつが」と唇を尖らせた。

「理由はなあに？どーせまたおやつがどうのこうのっ」

「まあまあマリー」

間に入った穏やかな声の主はこの施設の主人、アンジュ夫人だ。

車椅子に腰掛けたまま、夫人はにこやかに仲裁した。

「先生は甘すぎるんですだからこの子達しょっちゅう喧嘩するんですよ！」

マリーはひょいっと両脇に少年らを抱え上げて抗議した。

「怪力女」

「なにか言った！？」

右脇に抱えられたメルの呟きにマリーが噛み付く。

左脇のアナンが涙目でびくりと震えた。

「あんた達仲直りするまで夕飯抜きだからね！」

マリーはそのまま二人を外に追い出し、鍵を掛けた。

「まったく！」

まだ掃除が残ってるのに！

「マリーは本当に元気ね」

クスクスとアンジュ夫人が微笑む。

この『憩いの家』を莫大な資産で築いた老婦人はいつだって穏やかだ。

金持ち故の心のゆとりなのだろうか。

マリーのような身よりのない孤児をひきとっては世話をしている。

「元気じゃないとやってられませ・・・」

「マリーお姉ちゃん！キサがおもらししちゃった！」

「あーもう！」

マリーは腕まくりをしながら、泣きわめく赤ん坊を抱き上げた。

びっしょりと濡れた衣服を手際良く脱がし、清潔なタオルで股をぬぐい、新しい服を着せる。今日だけで五回は同じ作業をしていた。

洗った手を拭きながらマリーはぼそりと呟く。

「私ってばいつ自分の子供が出来てもばっちりね」

「残念だな、相手が出来たのか？」

耳元で囁かれ、マリーはびくっと肩を震わせる。

「大佐！！」

振り返ると随分と背の高い青年が目を細めて立っていた。

「久しぶりだね、マリー」

「帰ってきてたんですか！」

顔を真っ赤にししながらマリーは今更ながらぼさぼさの髪やほつれたエプロンを気にして、意味はないけれど手で押さえ込んだ。

「うん、今朝方ね」

青年はマリーを見下ろして柔らかく微笑む。

伯爵家の長男で、今は軍人をやっている。

長らく都市で暮らしているが時折休暇をもらってはこうして村にも顔を出してくれるのだった。

「それにしてもさっきからここにいたのにマリーは怒ってばかりで気づいてくれなかったね」

おかしそうに笑われ、さらにマリーは顔を赤くして俯いた。

ああまた子供扱いだ。

次に会った時はちゃんと女性として見てもらえるように頑張ろうと思っていたのに。

「すみませんね、うるさくて」

心の中で悔いても、勝手に口から出るのは可愛くない言葉でまた自己嫌悪する。

それでも彼は気にした様子もなくきょろきょろと室内を見渡した。

「少し顔ぶれが変わった？」

「・・・そうですね、働ける年齢になって外へ行った子もいますし、新しく入所した子もいますよ」

「そうか」

「大佐は、お変わりなく？」

「まあね」

フレイ・アルフォード。

それが青年の正式な名前だったし、マリーだって知っているけれど彼が軍人になってからはさらに壁のようなものを感じて、いつの間にか称号で呼ぶようになっていた。

フレイは相変わらずマリーと呼んでくれるのに。

マリーはお茶を入れますね、と木製のテーブルにフレイを架けさせた。

その隣に車椅子を転がしながらアンジュ夫人も並ぶ。深いシワを刻ませながら夫人は懐かしむようにフレイに微笑んだ。

「坊っちゃんも立派になりましたね」

「坊っちゃんはよしてください、もう23ですよ」

低く落ち着いた声でフレイは苦笑いを返す。

すっかり大人になったフレイは確かに坊っちゃんと呼ばれるような風貌ではなかった。

「ああ、不快にさせちゃったならごめんなさい。年を取るとね、時間の流れがあっという間で、坊っちゃんがまだ小さかった頃が昨日みたいに思えちゃうんですよ」

クスクスと上品にアンジュ夫人が笑う。

マリーは紅茶のポットをテーブルに並べながら、慎重にお茶を注いだ。

「マリーは16になったのだけ？」

不意に話しかけられマリーはまた少し驚いた素振りをしてしまった。

「そ、そうです！」

「早いよなあ。もうすっかり娘さんだね」

娘さん

それは、`おんなのこ、よりも上の女性に対する呼び方だ。

しかしマリーの喜びも束の間、フレイは悪気もなく余計な一言を加えてしまう。

「恋人は出来た？」

なるべく落胆を顔に出さないよう気をつけながら首を振る。

「私みたいな怪力娘は誰も相手にしてくれませんよーう」

茶化して言うと場は和んでもマリーの心だけは白けてしまった。

「おかしいなあ。僕のマリーはこんなに可愛いのに。村の野郎どもは見る目がないな」

物心着く前からフレイに遊んでもらっていたマリーは、彼の指す`可愛い、が犬や猫を慈しむ感情と近いことを知っていた。

だから、今はもうそんな一言にとびきり喜んでそのあと落ち込まなくて済まなくなっていた。

「大佐こそ、ご結婚は？」

マリーは内心ドキドキしながらたずねる。

「ああ、今度見合いをすることになってる」

「えっ」

マリーはいつものように`予定なんてないよ、とか`マリーがお嫁さんになってくれる？、などの冗談が帰って来るとばかり思っていたから予想外の答えに固まってしまった。

マリーの恋心を知っているアンジュ夫人は変わりに口を開く。

「まあ、あの大佐がついにですか？」

「相手の方には申し訳ないですが、父に頼まれて、仕方なく・・・」

断れたら良かったんですけど、と紅茶を口に運ぶ。

フレイが結婚。

結婚？

まさかと思った時、正午の鐘が鳴り響いた。

町の教会の古びた音はグーテンモルンの全てに時を知らせる。

フレイは窓の外を眺めながらふんわりと微笑んだ。

「変わらないね。この音を聞くと、ああふるさとに帰ってきたんだなって思うよ」

マリーも頷く。

「そうですね、あの鐘楼が休まない日は一日もありません」

そして優しく時の流れを教えてくれる。

マリーは無論毎日この鐘の音を聞いているからフレイのようにいちいち感慨深くなったりしない。

けれど改めて耳を澄ませば、それはまさにグーテンモルンの音だった。

「それじゃ、僕はこれで」

「あらもうお帰りになるの？」

立ち上がったフレイに夫人が残念そうに肩を落とす。

「すみません、約束がありまして。また伺います」

「ふふ、若い人は忙しくて素晴らしいわね。マリー、大佐を送るついでに夕飯の買い出しもお願いできるかしら」

「はい」

マリーは慌ててエプロンを外し、手提げ袋を手を取った。

「いつまでいらっしゃるんですか？」

補正のされていない砂利道をマリーとフレイは並んで歩いた。

「今度のお祭りまではいる予定だよ」

「そうですか」

とゆうことは今回の休暇はあと2週間はあるのか。

マリーは久しぶりに会えた想い人の横顔をこっそりと盗み見る。

いつ見ても端正な顔立ちで、しかも年をますごとに、かっこ良くなっている気がする。

名ばかりの将ではなく、訓練を積んだ彼は精悍な身体つきをしているし、加えてこの甘いマスク。都ではさぞモテるのではないだろうか。

「マリー？」

突然フレイの黒い瞳とぶつかってマリーは素っ頓狂な声をあげてしまった。

「はい！」

「聞いてなかつただろ」

フレイの横顔を凝視していた間に、なにか話しかけられていたらしい。

全く聞いていなかった。

「すみません、もう一度仰って頂けますか」

「なにをを考えてたんだい？」

「えっ」

大佐の顔が綺麗だなあと感じてました。なんてとても言えない。

「わ、忘れました」

ごまかすとフレイはくすくす笑う。

「やっぱり、マリーは変わらないな」

それは、成長してないという意味だろうか。

聞いてみようか逡巡しそうな時だった。

「若様」

その呼びかけに二人して後ろを振り返った。

今しがたマリーたちが歩いてきた道から、ゆったりと馬車が追いかけてきた。

二人の前で停まると、窓を開けて可愛らしい娘が声をかけてくる。

「お帰りですか？」

透き通った優しく細い声音。

ハニーブロンドの髪はふんわりとコテで巻いてあり、娘の育ちのよさがうかがい知れた。

マリーの記憶が正しければ彼女は確か

「エリカ」

フレイが声をあげる。

そうだ。彼女はエリカ。

町の豪商の娘で、即ちお金持ちのお嬢様だ。

慈善活動のバザーかなにかで見かけたことがあるから間違いない。

「偶然ですわね、私もこれから帰るところだったんです」

エリカはにこにこことフレイを手招きする。

「良かったらお隣をどうぞ。ご自宅までお送りしますわ」

「いや、いいよ」

フレイが断ると、エリカはようやくマリーの存在を視界に止めた。

一瞬で上から下まで見渡し、エリカは小間使いかなにかだろうと納得する。

「大佐、どうぞ馬車に。わたしはこっちに用があるので、ここで」

マリーは一步下がると、素早く頭を下げる。

「そう。じゃあ、ここで。気をつけてね」

「はい」

馬車に乗り込んだ大佐を見送って、マリーは手提げ袋から買い物メモを取り出した。

「・・・嘘じゃないもん」

ただ。あの馬車が来なければ、もう少し一緒にフレイと歩くことが出来た。

マリーにとって、それはとても残念な出来事として記憶に残った。

馬車を見送った後、マリーは大きな通りへでた。

とは言っても小さな村だ。

ほぼ顔見知りの店が並び、客を待ち構えている。

「こんにちはマリー」と魚屋のジョセフが手を振る。その隣のパン屋のエリは美人だから、今日も若者たちに言い寄られて、それをあしらっていた。肉屋のハーゲンは主婦共の世間話に付き合いながら図りにラム肉をのせていた。（ちょっぴりオマケをしてくれるいい人なのだ）

今日の夕飯はくず野菜と肉のトマトスープにしようマリーは決めていた。肉は余り物をわけてもらえるし、トマトは形の良くないのを八百屋のティップから安くして大量に買うことができる。

野菜はマリーが大事にしている家庭菜園でだいたい採れる。これでスープの材料は揃うわけだけども、育ち盛りの少年少女たちがそれで足りるわけがなく、財布とにらめっこしながらなお腹が膨れるものを物色していた。

「マリー、白魚のいいのがあったよ」

と、ジョセフがわざわざ店内から出てざるに乗せたそれを見せてくる。確かにイキがいいし、値段も手頃だ。どうしようかと悩んでいるところへギンガムのエプロン姿のジェシカが現れた。

「よしなさいよ白身なんて。アナンはどうせ残すわよ。ね、マリー。それよりウチの店に来てよ。余りそうなラム肉があるの。引き受けてくれない？」

このままじゃ腐っちゃう。とジェシカはひとつに結った金の髪を揺らした。マリーは頷く。

「そうね。お肉はご無沙汰だったし。そうしようかな」

「そんな」と、嘆くジョセフを置き去りにし、娘二人は3軒先、緑壁の喫茶店へ向かった。入口の側には秋桜やかすみ草が綺麗に植わった鉢が所狭しと飾ってある。ジェシカの母親の趣味だ。マリーが押すと、ドアベルがチリン、と可愛く揺れる。

「あらマリー、いらっしやいな」

ジェシカの母親のミモザがカウンターの奥から挨拶をしてくれる。「こんにちは」とマリーも会釈した。細身のジェシカと違って、ミモザはとてもふくよかだ。マリーの評価では、おそらく村一番。

「ママ、珈琲を二つね」

ジェシカは奥の特等席にマリーを案内した。肉を買ったらすぐに出ていこうとしていたマリーは首をかしげる。逃がさないといったふうにジェシカはその向かいに腰を下ろす。

「お願いがあるのよ」

ああやっぱり。とマリーは予感が的中して笑った。

ジェシカは眉をよせて随分と深刻そうに言う。

「実は今度の日曜日にウイスター様のお屋敷で大掛かりな音楽会があるのね」

「まあ、いいわね」

「よくないわよ」

ジェシカはこの世の終りのような顔をする。

ウイスター氏はフレイと同じ貴族の身分で、農場経営が主な家柄だった。

マリーも収穫期には臨時雇用で世話になったことがある。横柄で声が大きくて、あまり好きになれそうにないタイプだった。その点フレイは偉ぶったことなど一度もないし、いつも穏やかな声で話してくれる。育ての親のアンジェ夫人と似通ったところがあり、だからマリーは彼を好きになったのかもしれない。

「その音楽会には都市の議員さんや王侯貴族の方もいらっしゃるらしくて、ウイスター氏はできる限りいいところを見せたいの。で簡単に言うとわたしも手伝い借り出されてるんだけど、ウイスターさんときたら注文は多いし拘束時間は長いし、もうへとへとなの。マリー、お願いだからあなたも来てくれない？」

「それは、別にいいけど、ウイスターさんは了承されてるの？」

「もちろんよ！あの人、あと1週間もないのにお屋敷全てのカーテンを変えて、家具も新調するなんて言い出してるのよ？本当は男手が欲しいところなんだけど、料理人もメイドも全然足りてないの。マリーみたいなテキパキした子なら他の人たちも大賛成よ」

ジェシカは笑顔でマリーの手を握った。

「ありがとうマリー。早速今夜にでもウイスターさんに話すわね」

「うん、わたしも先生に言わなくちゃ。子供たちの世話もあるし」

話が一段落ついたところでミモザ夫人が白磁のカップを二つ、盆に乗せてやってきた。

「おまちどおさま。熱いからゆっくり飲むんですよ」

母親らしくミモザ夫人は注意してまたカウンターの中に戻ってゆく。

肉をもらったら早く帰って食事の支度に取り掛かろう、とマリーは珈琲に口をつけ、少し火傷をした。

イザベラと紅茶

その翌日、マリーはウィスター邸の執事室にいた。いつも外から眺めるばかりの屋敷の内部に入っているだけでも非日常なのに、細い眼鏡を掛けた白髪まじりの女性に上から下までじろじろと見下ろされている。

使用人頭のイザベラは臆病な態度を取られることが一番嫌いだと聞いていたマリーはなんとか背筋を伸ばして、視線を泳がせないよう注意をはらった。

「始めましてマリー。私はここで使用人頭を務めておりますイザベラ・オルグレンと申します。あなたはアンジェ・イルベラス夫人の施設で育ったそうですね。今もそちらでお仕事をなさってたとか？」

「はい。夫人の施設経営のお手伝いをさせて頂いてます」

イザベラは鋭い眼差しは緩めず、「よろしゅうございます」と、臨時の雇用契約書にサインをした。

「身元はしっかりしていますしアンジェ夫人の人柄も存じ上げております。本日からよろしくお願ひしますね、マリーさん」

慇懃に言いつつも、本音は一刻も早く仕事にとりかかってもらいたいイザベラは側にいたジェシカにマリーを預けた。

「マリーさんにはお台所と客室の準備をお願いしようと思っています。ジェシカ、よろしくお願ひするわね」

そう言うと、眼鏡の位置を調節しながら足早に部屋を出て行った。

マリーもジェシカに案内されるまま、使用人室へ向かう。ウィスター家の使用人は皆同じ服を着る決まりで、マリーにもジェシカと同じ深い紺色のメイド服が支給された。真白なエプロンは絶対に汚しちゃダメよ、とジェシカが先を立って歩きながら注意する。

「お客様が見えた時に見栄えが悪いからですって」

薄く、フリルを贅沢につかった前掛けは可愛らしいけれど少し使いづらい。

マリーは施設で使っている、普段の厚い生地のエプロンを初めて恋しく思った。あの子は立派なエプロンなのだ。

ウィスター家での仕事は思ったほどの労働ではなかった。

思えばマリーは普段も掃除や洗濯、子供の世話までやいているのだから当然かもしれない。

もちろん意匠を凝らしてある窓や調度品を磨くのは初めてだけれど、新鮮味があって面白いとさえ感じていた。

それにしても、天蓋付きのベッドなんて初めて見たわ。

一人用の客室のはずだが、大人二人は余裕で眠れるであろうベッド。天井から床まで覆っている重厚なカーテン。

お金持ちのする事はわからない。

マリーは肩をすくめて次の部屋に移ろうと廊下へ出た。

と、そこへイザベラが姿を険しい顔つきで近づいてくる。彼女の鋭利な顎と冷やかな雰囲気

、マリーは身を固くしてしまった。

「ちょうど良かったわ。マリーさん、仕事をお願い出来るかしら」
別段、口調は先ほどと変わらない。マリーは少し緊張を解く。

「はい。わたしに出来ることでしたら」

マリーの返答に、イザベラはもちろんです、と即答した。

「誰にでも出来る仕事です。やる気のない人にはできませんが」
イザベラは誰に対しても誠実な対応を望んでいた。それは自身で対しても例外ではないらしく、一瞬も気を抜けないといった責任感から、いつの頃からか知らぬ内にいつも厳しい態度をとるようになっていたらしい。塵ひとつ落としたりしたくない。主人の要望は全て応えていきたい。先回りをした行動がしたい。それは名誉欲などではなく、その方が気持ちがいいからで、中途半端な仕事をしてしまうと、胸の奥につっかえが残ったように具合が悪くなるのだ。

マリーは分かりました。と頷く。

「それで、どんな？」

「お客様にお茶を運んでください。お館様の大事なお客様ですので、くれぐれも粗相のないように」

「失礼いたします」

マリーは教えられた通り、ノックをしたあと部屋に入った。

紅茶と菓子のセットを乗せたワゴンを見た目こそ煌びやかだが年季が入っているらしく滑りが悪い。

足元に注意しながらマリーはそっとワゴンを押す。

貴賓室は日差しを浴びて明るく、屋敷の主人ウィスター氏の豪快な笑い声が響いていた。その向かいに、客人が腰掛けています。

「お待たせしました」

一先にお客様から、先にお客様から

マリーは温めておいたカップに、紅茶を淹れる。

ウィスター氏は気にした様子もなく、延々と客人に唾を飛ばす勢いで話しかけている。

「そして今年の収穫はまあ林檎がいい出来でしてね。どうです、軍の方では召し上がりませんか？」

「遠征で、特産品はよく食べますね。ウィッカーでは酒が特に美味かったですよ」
思わずカップを落としそうになった。

低く、落ち着いたその声音はマリーのよく知るものだ。

「ほう、お酒も嗜まれるのでしたら是非今夜どうですかね」

「いいですね」

笑みを含んだ声に、マリーは締め付けられそうになった。

彼の声は心臓に悪い。

挙動不審になったメイドを、フレイが見上げた。

「…………あれ？マリー？」

意表を突かれたらしいフレイは目を丸くして、メイド服姿のマリーを見つめる。

珍しく髪をまとめあげ、うなじを出している少女がいつもより大人びて見えた。恥ずかしそうに、紅茶を注ぎ終えた少女は、震える手でソーサーをカチャカチャと鳴らしながら、フレイの前に差し出した。

「…………どうぞ」

「君、もっと愛想よくできんのか？」

ウイスター氏は小声でマリーを睨みつけると、すみませんね、とフレイに笑顔を向ける。

「いいえ、頂きます」

フレイは紅茶に手を伸ばし、いい香りですね、と褒める。

「そうですね、うちの茶葉は隣国から仕入れているものでして、これも遠方なので手を入れるのが難しい品でしてね」

ウイスター氏が話しに夢中になっている隙に、マリーは貴賓室をあとにした。

ワゴンを押しながら、先ほどのフレイを思い出す。

いつものくだけた格好ではなく、きちんとネクタイを締め、前髪も上げていたフレイは一段と輝いて見えた。

マリーは一人で顔を赤くしながら、うるさく跳ねる心臓をなんと押さえつけた。

なんて狭い町なんだろう！

帰ってきた故郷は、いつもの通りにフレイを暖かく出迎えてくれた。

家族はもちろん、親交のある町の人々や昔から仲の良かったマリーも、変わらずフレイに接してくれる。

しかしながら、このウイスター氏が苦手なことだけは大人になった今でも克服できていなかったらしい。

今も自分にごまをすってくるこの初老の男からどう逃げようかと考えているところだ。

「そう言えば、マリーは以前からここで働いているのですか？」

「マリー？」

ウイスター氏はほぼ胴体と繋がっている首をかしげる。

「さっきお茶を持ってきた女のコですよ」

「ああ、ああ。いいえ、あんな娘は今日初めて見ましたよ。今度の音楽会で人手が足らんもんで、助っ人を幾人か頼みましたが」

ウイスター氏はいやはやお恥ずかしい、と頭の後ろに手を回した。

「使用人のことはほとんどイザベラに任せっきりでして」

「そうでしたか」

言いながら、フレイはどこかほっとしていた。

ウイスター氏は人使いが荒いことでも定評があり、マリーまでがその犠牲になっているのではと穏やかでない気持ちがあったのだ。

マリーは血こそ繋がらないものの、小さな頃から見てきた大事な妹のような存在だ。

一人っ子のフレイには自分の後ろをついて回ったあの少女がまだ雛鳥のように思えてならない。出来ることなら、ウイスター氏の手伝いで一生を終えるよりももっと彼女には楽しい生き方をしたい。

僕の屋敷で働いてくれてもいいんだけどなあ

そう考えると、不思議とくすぐったい気持ちになった。

よく動き、よく喋るマリーが屋敷にいたらさぞ賑やかだろう。

「それです、その音楽会の日までに荷は全てそろおうとは思いますが、なんとか若さまにもご助力頂ければと」

いつの間にか話を本題に戻っていたウイスター氏は、資料をテーブルの上に並べていた。

その一枚、料理のリストを手に取り眺める。ロブスターや、子羊のステーキ、都市の一流レストランばりのメニューが並んでいた。

ウイスター氏の気持ちは分からなくもない。

今度の音楽会には都市の貴族や、異国からの貴賓客も訪れるという。

なぜ、この町が選ばれたのかを誰も問いかけない。

「分かりました。父には私からかけあいましょう」

フレイが頷くと、ウイスター氏は顔を輝かせた。

「さすが、若君ですな、頼りがいがあります」

二人は握手をして、解散した。

屋敷へ帰る道中、同じ軍服仲間のブラッドが煙草をふかしながら話しかけてきた。

「よお、フレイ坊っちゃん」

からかうように煙を吹きかけられ、フレイは片手でそれをはらった。

「よせ」

「愛想が良いのは故郷の人間にだけかよ」

「愛想が悪いのはお前にだけだよ、ブラッド」

ブラッドは苦笑いして、フレイの肩に手をかけた。

同じ背丈の二人は並んでいるととても目立つ。オマケに軍服だ。

もの珍しそうに通りすがりの人々は見つめてくる。

しかし、どの人間もフレイを見ると親しみのこもった挨拶を返してきた。

生まれてからずっと、軍人は嫌われるものだと思ってきたブラッドに、これは実に意外だった。

「ところで、大佐。収穫は？」

ブラッドも休暇を利用して、フレイの故郷に遊びに来ているフリをしている。

フレイは一段と声を落とした。

「やっぱり、今度の音楽会が怪しいと思う」

「了解」

軍の機密事項を抱えた二人は、ほとんど唇を動かさずに話した。